

ONAIR

NO. 98

放送大学通信 オン・エア

発行月 平成22年6月

発行 放送大学

〒261-8586 千葉県美浜区若葉2丁目11番地
043-276-5111(代)

CONTENTS

平成21年度学位記授与式	1
放送大学教授対談第4回	5
平成22年度学部・大学院開設科目紹介	9
第2回学生エッセイコンテスト	12
Voice of Student	14
就任・退任のご挨拶	16
アクションプラン2010について	18
インフォメーション	19

学位記授与式が行われました

平成22年3月27日、2009(平成21年度)学位記授与式が、NHKホールにおいて挙行されました。

当日は学部卒業生と大学院修了生と同伴者をあわせて、大勢の方々が出席いたしました。

学歌演奏、学長式辞、鈴木文部科学副大臣並びに久保田情報通信政策局大臣官房審議官からの祝辞に引き続き、卒業生・修了生総代による謝辞で閉式となりました。

学長式辞

学長 石 弘光

卒業生の皆さん、ご卒業、誠におめでとうございます。本学の教職員を代表して、心からお喜び申し上げます。本日は、皆さんをこれまで身近で支えてこられたご家族、ご友人、そして知人の方々も多数お見えと思います。北は北海道から南は沖縄まで全国から、2000人を越える方々が、この会場にお越しです。今日は、ぜひ皆さん全員で卒業生と喜びを分かち合ってください。

さて各地から桜も開花の知らせも届き、春を迎えた今日この日に、文部科学副大臣はじめ多数のご来賓をお招きし、このNHKホールにおきまして、かくも盛大な学位記授与式を挙行できますことは、この上もない喜びです。卒業生の皆さんにとっては、今日までの道のりは長くて厳しいものがあったと思います。いくら所属する学習センターで先生方から直接に教えを受けても、職員の方から親身に支援をいただいても、あるいは仲間と会え共に励ましあっても、遠隔教育による放送大学での学習は基本的には孤独で自分との闘いなのです。

皆さんは学部にあつては少なくとも4年間、また



大学院にあつては少なくとも2年間、自分と闘いに打ち勝ち、今日このゴールに到達されたわけです。われわれ教職員もこのような皆さんの努力の積み重ねを知っているだけに、皆さんのこの快挙に心からの拍手を送っています。職場の仕事とどう折り合いをつけるか、家事や育児との中でどう時間を見つけるか、肉親の介護の傍ら学びをどう継続できるか、あるいは退職後の人生で学びとどう向き合ったか、皆さんは様々の境遇と闘いつつ、今日の晴れの日を迎えられたわけです。おのおのの目標に到達され、本日、皆さんは達成感で一杯であろうと思います。改めて、おめでとうと申し上げます。

さて皆さんが、この放送大学で静かに学んでいた



石弘光
放送大学学長



鈴木寛
文部科学副大臣



久保田誠之
総務省
情報通信政策局長
大臣官房審議官



この時期に、われわれの身の回りで、歴史的に大きな変化が起こっていたのです。ここ数年間に目を凝らしても、日本国内あるいは世界、地球上にわれわれの生活と直接、間接に影響するような大きな変革が生じていました。昨年、日本では戦後初めての政権交代が実現し、民主党政権となりました。外交、安全保障に、日本経済の建て直しに様々な問題がかかえており、これからが正念場でしょう。国の借金が先進国で最悪なまま、少子高齢社会を迎える日本の社会の行方にも、われわれは国民として最大の注意をはらわねばなりません。深刻さを増して格差社会の是正も緊急の課題です。

他方、世界に目を転じるとアメリカでもチェンジを訴えたオバマ氏が大統領に選出され、新しい風が巻き起こりました。一昨年生じたリーマン・ショックによる経済危機に耐え、アメリカ経済も回復に向うことでしょう。またお隣の中国は、現在確実に経済力をつけ、GDPでも早晚日本を凌駕すると見込まれています。このような国際社会の中で、地球温暖化の阻止に国際間で意見がまとめきらずに、地球の将来に暗い影をおとしています。

このような出来事は、ほんの一例に過ぎません。その他にも、解決を必要とする多くの現象を、皆さんは見聞しているはずです。皆さんはこの放送大学で、人文、社会、自然科学の分野で学んだ専門の知識を基に、われわれの身近で起こる様々な出来事に対し、積極的に考え、自らの考えをまとめそれを外に発言する姿勢をとってください。このような姿勢こそが、皆さんが放送大学で学んだ成果を、社会に還元することにもなるのです。

今日皆さんは、卒業の喜びに溢れ、すべてが終了したかの気持ちになってられるかもしれません。実は、今日は事の始まりで、人生において皆さんがやるべき仕事はまだ山ほど残っているのです。昨年も触れましたが、卒業式は英語で、commencement

ceremonyと云います。大学を卒業するという事は、「終わり」でなくまさに「始まり」を意味しているのです。

本日は皆さんの旅立ちの日です。この機会に、次のようなはなむけの言葉を1つ送りたいと思います。

これからもたえず挑戦する気持ちを持ち続けてください。人間、とかく安易に流れるときには、これまでのしきたり、考え方に従い、後ろ向きの志向になり面倒なことを避けがちです。しかしこれでは、自分の成長がとまり、将来の更なる進歩が望めません。

19世紀から20世紀にかけアメリカで活躍した詩人ロバート・フロスト (Robert Frost) は、その詩「通わなかった道」 (The Road Not Taken) で、次のように言っています。

「森で道が分かれた。私は、あまり人の通らぬ道を選んだ。それで全てが変わったのだ」

(Two roads diverged in a wood, and I—I took the one less traveled by. And that has made all the difference.)

森に分け入ったとき、フロストの云うように2本の分かれ道に出会うことがよくあります。そのときに、通いなれた道を選ぶか、それともこれまでほとんど未知の通ってことのない道を選ぶかは、まったくわれわれの自由です。人生の岐路を決定するような分かれ道に、生涯のうちいくつか遭遇することもあるでしょう。皆さんが放送大学に入学され、学習を始められたのも一つの岐路での選択であったことでしょう。これからも、人生をいきいきと悔いのないように送るためにも、どうか通いなれない未知な道にでも、挑戦する気構えを失わないでください。それによって、自分の人生にまったく新たな展望が拓けるかもしれません。

以上、皆さんに期待をこめ、これから取るべき行動について私の希望を述べました。卒業生の皆さんの更なる飛躍を期待すると同時に、われわれの母校

である放送大学の将来の発展に思いをはせる必要があります。1983年に創立された放送大学は、今年で27年目を迎えます。その間、生涯学習の担い手として、遠隔教育によりあまたの人材を育ててきました。これまでの卒業生の総数も5万人を越え、毎年その数を増やしております。いまやITによる情報化が一段とすすみ、また遠隔教育手段による生涯学習は世界的に大きな流れとなっております。放送大学においても2011年10月から、BSデジタル放送による授業開始が予定されています。このことにより、高品質の魅力溢れる放送授業が全国に提供できるはずです。

政治の仕組みや経済社会が変化する環境の中、放送大学も新しいモデルを構築しその実践に向け、次の新たな4半世紀に向け努力せねばなりません。この1月に公にしたAction Plan 2010において、戦略的な視点から、いくつもの具体的な提案を行っております。どうか時間を見つけて、ご一読ください。大

学の決意が伝わってくるはずです。このように新たな方向に向け一歩踏み出すためには、教職員はもとより



のこと、学生、卒業生の皆さんの協力も欠かせません。本日、卒業される皆さん、どうかご自分たちの学習センターの同窓会に所属され、その活動を通じ母校の放送大学を見守っていただきたい。現役の学生はもとより、特に卒業生に愛される大学に、放送大学もならねばなりません。この目標に向かって、われわれ教職員一同、これからも努力を積み重ねていく所存です。

これからの皆さんのご健闘とご多幸を祈り、学長式辞を終わりたいと思います。ご清聴有り難うございました。

謝辞

教養学部卒業生代表 産業と技術専攻 原田 美紗子

本日は私たちのために盛大な学位記授与式を挙行下さいまして誠にありがとうございます。

石学長を始め、諸先生方、ご来賓の皆様、関係職員の皆様に卒業生を代表して厚く御礼申し上げます。また只今は学長ならびにご来賓の皆様から心温まる祝辞を賜り、感銘を深く致しますと共に、更なる自己研鑽に努めたいと、決意を新たにしております。

私は平成四年、地域の会館でふと手にしたリーフレットの内容、つまり入学試験がないこと、一科目から学べる大学教育であること、学費が格安であること、この三点に惹かれて入学いたしました。当時はCSによる番組配信は始まっておりませんし、現在のようにテープの貸し出しも行われていませんでした。したがって講義室で定時放送を視聴するか又は、再視聴室で視聴する他ございませんでした。私は家庭の都合でセンターには頻繁に通うことが出来ませんので、聞き漏らしがないようにテープを小刻みに再生し、ノートをとっておりました。

濱田先生の『日本列島の地球科学』や奈須先生の『日本の自然』など、大変興味深く楽しい授業であったことを思い出します。また、香山先生の『建築意匠論』では建築物の美しさが緻密な計算の上に生み出されたことを知り、以

後街並を見ることが楽しみになりました。この街並への興味が今回の卒業研究へと繋がっております。

この研究を始めようと思いましたが、空き家が増加傾向にある現況下で行われる農地の宅地化に疑問をいだき、その開発要因を明らかにしたいと思ったからでございます。テーマは開発実行中の一地区を事例とした街づくり計画です。必要な情報は図書館、市役所、区画整理事業組合、農協、現地調査などで収集いたしました。開発地区の土地利用の変化を知りたいと思い、従前・従後の地籍界図の提供を区画整理業組合にお願いしたところ、「個人情報保護のために地権者以外への提供は出来ない」と断られたこともございましたが、この件以外は概ねどこでも快く質問に応じ、資料を提供して下さいました。

書き進めて行く過程で次々に沸き上がってくる疑問をただし、解明する作業は大変でありましたが、その大変さ以上に充実して楽しい作業でした。しかし、限りある時間の中で、適切な言葉を用い論理的に文章を組み立てることは、また苦しみの連続であり、小浦先生のご指導なくては到底成し得ない研究でございました。こうして曲がりなりにも纏めることが出来、只今ほっと安堵しております。



けれども完成度の上で満足出来ず、書き直したい気持ちが残っております。本研究によって当初考えても見なかったコスモポリス計画、関西国際空港建設など行政の枠を超えた計画がこの宅地開発に影響を及ぼしていることが分かり、データを収集検証し、分析することの意味を認識いたしました。

本学は学業の場であると同時に、社会経験豊かな友人との出会いの場でもありました。これらの友人は私の生涯の宝でございます。地元へ帰るにあたり、私はケネディ大統領の就任演説の一節を思い出します。それは「国があなた

謝辞

大学院修了生代表 田中 一典
総合文化プログラム 環境システム科学群専攻

本日は、私ども卒業生、修了生のために、このような盛大な式典をご開催くださり、誠にありがとうございます。また、先ほどは、学長先生、ご来賓の皆様から温かいお言葉を賜り、心よりお礼を申し上げます。

私たち一同が様々な環境を乗り越え、共にこの修了という喜びのステージに立つことができましたのも、ひとえに学長先生を始め、熱意を持ってご指導くださいました先生方、親切にご対応くださいました職員の皆様、励ましてくれた仲間や友人たち、そして温かく支えてくれた家族のお陰であると、深く感謝を申し上げます。

私が大学院へ入学した動機は、日本の固有種で水温の低いきれいな水環境に生息する絶滅危惧種のニホンザリガニと身近な水辺環境の保全に関するボランティア活動をはじめたことにあります。現在、地域の子供たちと一緒に観察会や調査会を行ったり、個体群保全や水辺環境保護に関するパネル展やシンポジウムを開催するなど、自然の大切さや外来生物の影響を市民レベルで共に考える活動をしています。

当時、放送大学の学部生であった私は、仕事と放送授業という生活の中で、卒業を半年後、仕事では数年後に退職を控え、「なりたい自分になっているだろうか」、「自己実現に向けて努力しているだろうか」と自分を見つめ直しました。そして退職後もライフワークである現在のボランティア活動に活かせる学習や研究をしていくことを決意し、引き続き働きながら学べる大学院へ平成二十年四月に入学しました。研究は、「絶滅危惧種ニホンザリガニの生息環境」に関するテーマを取り組みました。大学院に入学したものの修了を迎えるまでに幾多の挫折や試練がありました。働きながら学び、研究し、ボランティア活動をすることは、様々な痛みを伴い、非常にパワーが必要でした。ボランティア活動では、

のために何ができるかを問うのではなく、あなたがあなたの国のために何ができるのかを問うてほしい」。この言葉を胸に、身近なところで、無理のない形で、本学で得た知識と経験を役立てて参りたいと思っております。

最後に今日までご指導下さいました石学長を始め、諸先生方、関係職員の皆様、さらに私たちを最後まで支えて下さった友人、家族の皆様、心より御礼を申し上げると共に、放送大学のますますのご発展とご臨席の皆様のご健勝を祈念いたしまして、謝辞といたします。

生態学から博物学などに関する様々な質問、シンポジウムでは外来生物の駆除に関する倫理問題、フィールドワークでは地域住民や公共機関との対応など、豊富な知識と問題や課題への対応力が要求されました。これ



らは仕事に対しても、放送大学の学部生、大学院生として学んだ知識やものの見方・考え方が大いに役立ちました。そこには以前とは違うロジカルに考える自分が存在し、成長している自分を感じることができました。

大学院での二年間は、平日は仕事と学習の両立、休日はフィールドワークとボランティア活動という日々を過ごし、人生の中で最も忙しく、しかしながら最も充実した日々を過ごすことができました。研究成果として、フィールドワークで、ダニに食われ蚊やブユに刺されながら、地道に収集したデータを分析して、生息を制限する環境要因の一つを明らかにすることができました。そして多くの方々とヒューマンネットワークを築くことができ、今後の研究や活動をしていくうえでの大きな財産となりました。ご指導くださいました松本忠夫先生をはじめゼミの先生方から研究に対し労いとお褒めの言葉いただき、今後も更に研究を続けていく決意を新たにいたしました。

私たちは、一人ひとりの環境は違っても、「学び続けたい」という同じ気持ちのもとに大学院へ入学し、本日、修了するとともに新たなスタートラインに立ちました。私たちは、学んだことを活かして社会へ還元し、貢献できるよう生涯学び続ける決意を新たに、今後も一生懸命に努力していきます。

最後に、放送大学の益々のご発展と、ご臨席の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げて、修了生を代表しての謝辞とさせていただきます。

生物多様性は 30数億年の いのち 生命のつながり



星 元紀教授(左)と岩槻 邦男 名誉教授(右)

2010年は国連の定めた「国際生物多様性年」です。今回は、植物学者として国際的業績を残された岩槻邦男先生(元放送大学大学院教授)と、放送大学教授で生物学者の星 元紀先生との対談をお送りします。生物多様性とは何か、日本人との関わりは?など、元「植物少年」と元「昆虫少年」の興味尽きないお話をどうぞ。(以下、敬称略)

神々を敬う中から生まれた 日本人の「自然との共生」

星 お忙しいところありがとうございます。去年はダーウィン生誕200年、「種の起源」発表から150年、gene(遺伝子)などの用語が作られて100年に当たりました。昨年を国際生物学年と願った一人なのですが、実現しませんでした。代わりにということではありませんが、今年が国際生物多様性年です。

岩槻 生物多様性という言葉は、多くの場合「保全」という言葉を伴って語られます。生物多様性条約^{*1}の事務局CBDの活動も「保全」中心です。でも条約を丁寧に見てみると、「保全」以外に「持続可能な利用」「遺伝資源の利用から生じる利益の公正で衡平な配分」も目的としています。実はこれがどうも理解されにくい。同条約と一緒に誕生した気候変動枠組条約は、「地球温暖化」というキャッチフレーズを得て広く認知されています。一方、生物多様性はなかなか普及しない。日本でも去年の内閣府調査によると60%以上の人聞いたことがない、と。ですから、やっと今年に生物多様性年を設定できた、というのが実情です。日本にとっては、COP10(生

物多様性条約第10回締約国会議)が愛知で今秋開催されるので、よい巡り合わせとなりました。

星 生物多様性と言われても「何、それ?」となりがちです。「種の多様性」ならまだ分かるのですが。
岩槻 言葉は普及していませんが、その内容は学校で習う生物学の中でとても大きい部分を占めています。ですから言葉を知らない、イコール生物多様性を知らないとはならないのですが、「保全」ばかりにとられると「多様なほどいい」という見方に偏りがちです。私たち生物学者は、30数億年前に単一のカタチで現れた生物が、なぜ億をも越えると推定される多様な種の構図を持つようになったのか、遺伝子レベルでも同じものは全くない状態まで多様化して生きているという現実を科学的にどう解明するか、に科学的な好奇心が喚起されます。しかし条約では、人間生活において極めて大切なものだから持続的に利用できるようにしようという「Our Common Future^{*2}」以来の考え方で生物多様性を使っています。この、持続的利用という言い方には人が自然をどうこうするという視点が感じられ、私は少し違和感を覚えます。それよりも、日本人が伝統的に持っている自然観、日々の生活と自然との関わりの中で生み出された「自然との共生」—人も自然の一部、だから自然と一緒に生きようという自然との付き合い方の方がじっくりくるように思えます。

星 国際的にも「人と自然との共生」が言われるようになってきましたが、本質的なところでニュアンスの違いを感じます。日本では、自然と一緒に生活するのはごく普通のこと。が、例えば中国の城郭都

市内には自然がありません。欧米や中国では、“と共に”ではなく自然を人間の管理下に置く、という発想が垣間見えます。

岩槻 日本政府は、COP10に向けてSATOYAMAイニシアティブ——里山のコンセプトを世界に広げよう、という取り組みを始めています。日本で人里・里山・奥山というゾーニングができているのは、まさに八百万の神々を信仰してきた生き方を今に受け継いでいるから。鎮守の森もそうです。中国にも同じような社稷^{*3}というものがありましたが、戦争になると相手国の社稷を破壊し、周囲の森を全部焼き払い天地とのつながりを断って初めて戦争に勝つ、ということになるんですね。人口動態推計によると、春秋戦国時代には人口が3分の1にまで激減しています。戦争だけでなく自然破壊によるものです。日本の、我こそは一といって大将同士がチャンバラやって決着したのとは偉い違い。勝った相手の氏神様も領民も大切にします。これはローマに似ていますね。征服した他市民の神様も自分たちの神様に並列させ、他市民も奴隷でない準市民にしています。信長の比叡山焼打ちだって寺の周囲しか焼いていません。博物館の仕事で中国の照葉樹林の調査に行きましたが、巨木がないんですね。武夷山のような世界遺産になっているところも同様で、少なくとも森は日本の方がきっちり残っている。それは、弥生時代の稲作開始から始まった農地開発が現在でも全土のおよそ20%に留まっているというゾーニングが守られているから。ところが欧米では絨毯的に開発している。日本では、人里を切り拓いた時でも森全体をご神体とし



星 元紀教授
東京工業大学教授、同大学生命理工学部長、慶應義塾大学理工学部教授を経て放送大学教授を務める。2004年、IUBS(国際生物科学連合)会長。専門は発生・生殖生物学および糖鎖生物学。

た鎮守の神様を祀っている。自然とうまい具合に共生を図ってきたのです。話は長くなりますが、「勿体ない」という言葉が典型的にそれを表しています。マータイさんのおかげで国際語になりつつありますが、「勿体」という言葉に牛へんをつけると「物体」になります。全てのものは神様からの



横浜市寺家ふるさと村に見る里地里山の景観。SATOYAMAイニシアティブではみどり豊かな二次的自然を大切にしようと呼ぶ。

授かりもの、神様そのものである、八百万の神々も「勿体」なんですね。物を大切にすることとは神様を大切にすることと同義なんです。もう一つ例を挙げましょう。江戸時代の江戸はパリ、ロンドンと並ぶ100万都市でしたが、いちばん清潔でした。江戸時代にはゴミという概念がなかった。その典型的なものが糞尿処理です。糞尿を川上に運んで、帰りに作物を積んで戻ってくる。それはおカネになったから、という歴史学者もいますが、それならロンドン、パリでやってもいいのにやっていない。結果としておカネになったかもしれないけれど、このリサイクルのおかげで江戸の町の清潔は保たれました。これはお上に言われて始めたものではなく、八百万の神々への信仰が物を大切にするというカタチで浸透していたからだと思うのです。

星 そのリサイクルの話と通じますが、生物は物質を徐々に分解しながら、少しずつエネルギーを取り出し、利用して生きています。同様にかつての日本人も、ゴミは完全に最後に行くまではゴミではない、という考えで自然と共生してきたのですが、今、本家本元の日本で急速にそういう考え方が失われてきています。今こそ日本の出番だと思うのですが…。

岩槻 同感です。私は、物質エネルギー志向がどんどん拝金主義に走り、明治以降の西洋文明礼賛が悪い方向に展開している、と思っています。明治以降、富国強兵で西欧に追いつけ追い越せは見事に成功しましたが、同時に維新以前の大切なものを忘れてしまった弊害が今出ているように思えてなりません。

DNAのごくわずかな変異から生まれた 生物多様性

星 地球の質量を大人一人の質量とすると、あらゆる

る生物をトータルしてもまつげ1本にしかありません。まさに微々たる世界——その中が大変複雑なことになっている。かくも僅かな物質から、凄まじいまでの多様性が生み出されているわけです。

岩槻 20世紀に物理・化学はとてつと進歩し人間の生活を豊かにしました。一方生物学は、分類学の檻の中に籠もっていたものが、ようやく20世紀後半、ゲノム側からのアプローチがなされるようになって生物学科学として展開するようになりました。30数億年前に生まれたDNAはほぼ100%正確にコピーされ続ける。しかしごくごくわずかなエラー——生きていく基本をエラーというのは私は好きではないので「変異」といいますが、ごくごくわずかな変異を生ずることによって生命は多様化し生き続けることができた。製品管理の世界では変異が出たら廃棄しますが、生物の世界では変異を大切に集団の中に残すことで生きることができたのです。その生きる原理、多様性というものを物理・化学のやり方で解析できるようになって初めて生物学へと進化した。あと何十世紀も先のことでしょうが、私はいずれあらゆるものは自然科学で解明できると信じています、生きるとはどういうことか、も。その結論は知り得ず、どう解明されるのか、その姿を思い描くのはとても楽しい作業です。

星 DNAは驚くほど精確に複製されますが、ほんの少しある誤りもたらす曖昧さ——私は「遊び」と呼んでいますが、その遊びがあつてなめらかに30数億年の生命の連続と多様性を支えています。

岩槻 小さな子供に「キミ、いつから生きている？」と聞くと、たいてい歳の数で答えますね。「そうじゃないんやで。キミのお父さん、お母さん、そのまたお父さん、お母さんと遡って30数億年前から生きたるんやで」と言うとビックリ(笑)。中学生に、生物の構成元素である「酸素や炭素や窒素をいつから持つてる？」と聞いたら「生まれた時から」と。「そうじゃないんやで。1年とは持ってないんやで」「1年前に会ったおじいちゃん、おばあちゃんは、1年前とモノは全部入れ替わるとるんやで」と言うところもビックリ(笑)。そういう意味では、自分は生まれた時から自分だと思っているけれど、自分はある瞬間だけ自分だし、30数億年間自分だとも言え

る。その長い時間、情報制御装置が連綿と働き、モノを入れ替え入れ替え一瞬も止まることなく生き続けてきた、その歴史の先に今の自分があるとも言える。これが生命(いのち)のつながりなんです。

星 生きているというのは、分子レベル、細胞レベル、個体レベル、種の

レベル、さらにはその上のレベルにいたるまであらゆるレベルで、一つ下の階層、すなわちそのシステムを構成する要素がどんどん入れ替わることによってシステムとして維持されています。その意味で先生のおっしゃる「生命系」——生物は、個体だけで生きているのではなく、他の生物とのさまざまな関わりの中で30数億年の歴史の中のある瞬間、ある空間における生命系の発露・存在様式である、という認識はよく分かります。

岩槻 その話になって初めて、生物多様性に意味が生じてきます。今地球上にある全ての生物は、種で言っても遺伝子で言っても極めて多様である。しかも、それは30数億年の進化の結果として多様なんだという正体をさして言ってるんです。私は、その正体を「生命系」という言葉で表現しましたが、その生物多様性の一つのエレメントとして自分が入っている、そうやって自分は生命系を生きている、ということですね。ですから、生物多様性を守るとか、利用するとかではなく、自分自身がその中で自分の生きざまを持続して行くという考え方が大事です。

生物多様性の 持続可能な利用のために

星 現在の絶滅のスピードはこれまでに最大の絶滅であったといわれるペルム紀の最後、いかにいえば古生代の最後より桁違いに早いといわれています。

岩槻 生物多様性がいかに大切か、を訴えるためには現状を踏まえなくてははいけません。そこで分かりやすいモデルとして絶滅危惧種がとりあげられます



岩槻 邦男 名誉教授
京都大学理学部教授、東京大学理学部教授および同附属植物園園長を経て放送大学教授を務める。現在は兵庫県立「人と自然の博物館」館長。東京大学名誉教授。わが国の植物分類学を世界的な水準に高める業績をあげた。

が、危惧種が守られると生物多様性も守られる、と早計に考える人もいます。そこで国連によるミレニアム生態系評価で、「生態系サービス」という言葉が出てきました。生物多様性は生活になくてはならないもの、人類の利益になるもの、を説明したもので、このおかげで生物多様性の大切さは確かに説得力を持つものになりました。しかし、先ほどの「持続可能な利用」と同じで「自然を利用する」という発想が見え隠れしてなりません。世界の森林は何兆円の価値があるとか、いろんな試算もあるようです。貨幣価値でものごとを判断する人にはより分かりやすいのでしょうか…。

星 「生態系サービス」という新解釈は生物学とは全く違う発想だな、と私もある種のショックを受けました。ある方の計算では、人間は毎日約4万種の生物を使って生きている、とか。危惧種に関して言うと、日本人は四季を大切にす文化の中で生きています。萩の寺とかアジサイ寺とかありますが、こういうことはキリスト教会ではあまり聞きません。逆に言うと、自然と共に、があまりに日常的で自然の異変に鈍感になっているのでは、と思うことがあります。

岩槻 欧米では1950～60年代から危惧種に関するデータを集めています。しかし日本人はあまり関心を持たなかった。日本列島は緑に覆われ、水も豊富。元々生物の多様性に恵まれていた。寺田寅彦氏は、同時に自然災害が多い、とも。そこから日本人の自然観——自然に感謝し同時に畏怖する、は生まれました。あまりに自然が身近すぎて見えなかったということはあるのかも知れません。地域のナチュラルリストの、何かおかしい、そういえば最近見かけない、といった声に背中を押されて実際に調べたところ、80年代



絶滅危惧種のひとつ、フクジュソウ。

のデータはイギリスと同じレッドで、愕然とした覚えがあります。ただ、生物多様性は単に「多様であればいい」ということではありません。生物多様性は自然そ

のものです。例えば、砂漠の多様度は極めて低いけれど、安定しています。砂漠に植林を——というのは、生産性を高める意味はあるでしょうが、実は自然破壊です。

星 森を切って何かをする、と本質的には同じですね。本来の生態系が壊される。

岩槻 人の営為全てが悪い、というわけではありませんが、生物多様性の大切さをきっちり認識した上での議論は必要です。こんなこと言うと叱られるけれど、私は「自然保護」という言葉にさえ人間の営為、おごりを感じます、自然を守ってやる、という。自然破壊なしに現代人の生活はあり得ません。その意味でも、日本の人里・里山・奥山というゾーニングに見る「自然との共生」から学ぶものは多い。

星 人類は農耕を始めてからこれまでの1万年の間に食べた食糧と同じ量の食糧をこれから50年間で食べ尽くす、と警告されています。そのため自然に営為を加えざるを得ない。大切なのはどうバランスを取るか、ですね。とても有意義なお話ありがとうございました。



「生涯学習。生涯教育ではない、自ら進んで学ぶということ—みなさんに期待します」(岩槻)。「“学ぶ”はもっと自由であっていい。みなさんはその可能性の広がりによってチャレンジしているということ」(星)。両先生から放送大学在学学生へエールが送られました。

※1 生物多様性条約

ラムサール条約やワシントン条約など特定の地域、種の保全だけでは生物の多様性は保全できないとの観点から、包括的な新たな枠組みとして国連環境開発会議(リオデジャネイロ地球サミット)に先立つ1992年5月22日に採択。同サミットにおいて署名開放され、日本は翌93年5月に締結。09年12月現在193の国と地域が締結。

※2 Our Common Future

1984年に国連に設置された「環境と開発に関する世界委員会」(通称「ブルントラント委員会」)が約4年間にわたる会合の後にもとめたレポートで、環境と開発は共存し得るもので、持続的な開発には環境保全や資源への配慮が必要不可欠であるとする「持続可能な開発」の概念を提唱した。

※3 社稷(しゃしょく)

古代中国では、土地とそこから収穫された作物が国家の礎であると考えられ、村ごとに社(土地の神)と稷(五穀の神)を祀っていた。古代王朝の発生に伴い祭壇で国家の祭祀を行うようになり、転じて国家を意味するようになった。

情報の世界('10)

放送大学教授
(人間と文化) 川合 慧

私たちは情報社会に生きている、と言われていきます。確かに、たった2~30年前とくらべても身の回りには山のような情報機器が溢れています、仮に今、これらが全部使えなくなったとしたら、生活が不便になるという程度にとどまらず、ほとんど暮らしてゆけなくなるかも知れません。このような情報社会を生きてゆくためには、まず情報の世界を自分のものにする必要があります。そうでないと、目先の便利さに振り回される結果、自分の意図しない行動をしてしまったり、知らない間に他者の思い通りに振舞ったりしてしまったり、大変な不利益や被害を蒙ったりすることになります。このような例はすでに大量に起きていて、情報社会の影の部分と言われてたりしています。

情報社会を生きてゆくためには、情報社会全般に

渡っての系統的、広域的、かつ原理的な把握を身につけておくことが必須です。もちろん、個々の専門的な内容を理解することは、私たち一般の社会人には無理です。必要なことは、少数の原理的な枠組みを理解しておくことなのです。そうすることによって、この複雑で変化の激しい情報社会を生きてゆくことができるのです。

本科目ではこの原理的な枠組みとして、記号の扱い、計算の原理とその性質、情報システムと社会、情報と法、そして社会と個人の関わりを取り上げ、それぞれについて他の項目との関連も含めて解説しました。情報そのものについての解説として、本科目が入門的な役割を果たすことを期待しています。



川合 慧 教授

基礎看護学('10)

兵庫医療大学副学長
(放送大学客員教授) 佐藤 禮子 慶應義塾大学教授
(放送大学客員教授) 三上 れつ

看護は、人間が生まれてから死に至るまでの期間の、生活者としての人々の健康生活に深くかかわり、専門職としての役割、機能を果たします。この役割を担うためには、必須とされる専門的知識・技術・態度を身につけ、自らが看護専門職者として機能する人間に成長する必要があります。看護の対象は、人、即ち個別性を重視する個人その人です。人の多様な価値観や信念に寄り添いながら、人間が本来的にもつ健康に生きる権利や尊厳を守り自立を助けることは重要な使命です。

実践の科学である看護学は、看護を実際に行う者の行動や行為に全てが表現されます。そして、看護実践の結果は、看護を実際に受ける人との相互作用から生み出されます。すなわち、看護がその人にとって有用であり、ある状態を改善させる効果を十分



佐藤 禮子 教授



三上 れつ 教授

に発揮できるためには、確かな理論や概念が必要であり重要です。

基礎看護学は、看護学の基盤となる領域です。本書は、看護実践において特に備えておく必要のある専門的知識や生活行動に関する看護技術を精選して15の項目にまとめ、学びやすい内容で組み立てています。

基礎看護学('10)は、医療をとりまく情報の変化を見定めつつ特にセルフケアを促進させる教育方法、チーム医療を発展させるためのリーダーシップの取り方、また、感染防御や倫理行動に関わる内容について充実を図っています。各章がどこに力点を置くかは小見出しを活用して下さい。

授業研究と学習過程（'10）

東京大学大学院教授
(放送大学客員教授) 秋田 喜代美

関西大学准教授
(放送大学客員准教授) 藤江 康彦



秋田 喜代美 教授



藤江 康彦 准教授

学校教育は国の未来の人材を育成していく根幹といえます。学習指導要領が改訂され、授業時数も増え、学校で実施される教育の質が問われる時代であり、教師もまた教える専門家であるだけでなく、学びの専門家となる時代となっています。本科目では、生徒が学級集団として授業の中で学んでいく過程とはどのような認知過程であるのか、また深く理解して学ぶためには教師がどのような点に配慮して授業をデザインしているのかという教師の思考や認知過程、また学校において学びあう過程に関して、学校と言う制度的な場で「教えるー学ぶ」過程を、教育心理学、学習科学の学術的視点から論じていきます。

教育心理学や学習科学の理論はこの10年の間に、生徒個人が学ぶ過程だけではなく、生徒同士が協働

でやりとりをして学ぶ過程についての研究の知見を発展させてきました。その発展によって数量的な実験研究だけではなく、質的に教室のダイナミズムが詳細に検討されるようになってきました。人と共に学ぶ過程を理解するのに必要な基本的概念を習得していただくことによって、公的な教育のあり方を外側から批評するのではなく、内側から理解し考えていただくことがねらいとなっています。この意味で教職にかかわっておられる方だけではなく、多様な場で教えることや学ぶことを考えておられる方にも積極的に参加していただきたいと思っております。

著作権法概論（'10）

国立教育政策研究所センター長
(放送大学客員教授) 作花 文雄

文部科学省大臣官房付
(放送大学客員教授) 吉田 大輔



作花 文雄 教授



吉田 大輔 教授

情報社会と呼ばれる現代社会において、多くの人々が日常生活や職業生活で様々な情報を利用し、また、自ら情報を生み出し、社会に発信しています。このような情報の利用等に際しては、著作権法など様々な法的問題が伴います。

最近では、グーグルによる書籍のデジタル化に関する米国の集団訴訟の和解案が日本の著作権者にも影響を及ぼし得ることが衝撃的なニュースとして報じられたり、あるいは、キンドルやiPadなどの端末機器が急速に普及し、我が国でも書籍の電子配信について将来構想を検討することが急務であることなどが日々報じられています。また、ファイル交換ソフトを利用して違法なコンテンツの配信が行われるなど、著作権侵害事件も頻繁に生じています。

著作権に関わる諸問題は、日々、私たちの身近で起こっていますが、これらの事柄を正しく理解し、適切に判断するためには、著作権法の基本的な知識を身につけておくことが不可欠です。

ただ単に断片的な知識を得るのみならず、一つの法制度を全体的に理解することは、どのような法律であっても、多大の労力を伴いますが、この講義は、著作権制度について、最近の具体的な事例をも踏まえながら、簡潔に、しかも、体系的に学ぶことができるように構成されており、多くの方々が情報社会の基本的な法律的素養を培うことができることを目指しています。

都市環境デザイン論('10)

放送大学教授 (社会経営科学プログラム) 仙田 満 早稲田大学教授 (放送大学客員教授) 佐藤 滋

21世紀も最初の10年が過ぎようとしている現在、この地球上で歴史的な変革が余儀なくされています。地球環境の制約が露わになり、一方でボーダレスな市場経済は社会的、環境的なひずみを大きくしてしまっています。途上国での爆発的な人口増加に対して、我が国では都市の縮退が問題になり、人口移動による多文化共生は地球上の様々な地域での課題になっています。

さて、この講義で扱う都市環境、すなわちビルトエンバイロメントは、このような課題を解決する基盤となる場であるだけでなく、そのデザインと実施のプロセスを通して解決への道筋を発見する機会を提供する場でもあるのです。ハードな物づくりやデザインだけではなく、ソフトな仕組みや活動を組み合わせることで、都市環境デザインは現代の様々

なそして複雑に絡み合った

課題を解決し、新たなビジョンを社会に提示することができます。

20世紀末から現在に至るまで様々な実験的取り組みが各地で展開されています。この講義ではこれらを紹介しつつ、特に放送講義では実際にそれらの試みに主体的に関わった当事者に現場でお話を伺い、課題と可能性を抽出し受講者の皆さんに自ら考えていただく構成になっています。

この講義で取り上げたテーマは皆さんの身近で、今まさに考えなければならない問題ばかりです。講義での学習と平行し、いかにこれらを具体的な場所で展開することができるか、構想していただければと思います。



仙田 満 教授



佐藤 滋 教授

哲学史における生命概念('10)

放送大学教授 (文化情報学プログラム) 佐藤 康邦

このほど、『哲学史における生命概念』の授業を印刷教材とともに大学院生の皆様のもとにお届けできるようになって、大変うれしく思っている。これで、名実ともに大学院の指導教授の役目をはたせるということが実感できるようになったからであるとともに、この授業で扱う、生命という概念を哲学に即して考えるという問題が、長年にわたる私の研究主題でもあったからということにもよる。

学問の場面で生命の問題を扱うとなると、一般には医学や生物学の場面で扱われるものが思い浮かべられることと思う。確かに医学、生物学での生命論と哲学における生命論が深く結びついていることは否定できない。特に古代や近代の前半においては、両者はほとんど重なっていたと言える。古代を代表

する哲学者アリストテレスは、古代における最大の生物学者でもあったし、近世初頭のデ

カルトの生命観は、当時の最新鋭の生命科学の立場を代表するものであった。しかし、近代の後半以降、科学と哲学との関係は必ずしもぴったりと重なるものではなくなってきた。自然科学の主流の生命観と哲学的生命観の間に離反が生じ、ついには、哲学の場面で生命を語ることが、自然科学の対象としては処理し切れないような人間の問題を語ることであった状況さえ生ずるにいたった。ニーチェやベルクソンの哲学がその例である。

この授業では、そのように哲学の存在理由に関わるものとして生命という概念が考察されている。



佐藤 康邦 教授

第2回 テーマ「学びと出会い」

放送大学 学生エッセイ コンテスト

エッセイコンテスト実行委員長・同選考委員 熊原 啓作
自然と環境 教授



第2回放送大学学生エッセイコンテスト優秀作品選考の経緯と作品について簡単に報告します。

「2009年度放送大学エッセイコンテスト」の実行委員会において議論の結果、第2回のテーマを「学びと出会い」と決め、7月から10月にかけて募集が行われました。「学び」の多様さと同じように「出会い」も様々です。友との出会い、恋人との出会い、師との出会い、本との出会い、芸術との出会い、学問との出会い、放送大学との出会い、研究テーマとの出会い、仕事との出会い、生き甲斐との出会い。あらゆる体験には出会いがあり、出会いがまた新しい体験を生むといえるでしょう。

今回の応募総数は52人で第1回の65人より少なく意外でした。テーマに具体性が欠けていたのではないかというものはある選考委員の感想です。男性19人、女性33人と割合では女性比率が第1回の38.5%から63.5%へと多くなりました。年齢は27歳から85歳まで拡がり、59歳までが34人、60歳以上が18人でした。学部生が46人大学院生が6人という構成で、所属学習センターは北海道から沖縄まで27学習センターに渡っていましたが、半数の26人は南関東であり、愛知と京都は1人、宮城と大阪は0人など大規模センターで応募者が少なかったことは周知方法に問題があるのでしょうか。

選考は2段階審査を行い実行委員会で21編に絞り、6人からなる選考委員会がその中から入選作品10編をえらびました。選考はなかなか難しく票が散らばったという印象でした。それだけに入選と落選の間の差は開きは大きくなかったといえます。それでも心に残る作品が入選し別表のように入選作品が決定しました。入賞者には賞状と副賞を差し上げました。佳作以上の作品は放送大学ホームページで読むことができます。なお佳作の重本俊明さんは昨年引き続きの入選です。おめでとうございます。

選考にあたってみて、書き慣れていない人が多いという印象でしたので、これから応募したいと思っておられ

る方に次のようなことに申し上げたいと思います。書きたいことは沢山あるでしょうが、それらを全部書こうとせず的に絞ったほうがよいのではないのでしょうか。また使う言葉、文字を大切に辞書で確認してください。書いたら声に出して読むことをお勧めします。誰かに聞いてもらうこともよいでしょう。また名エッセイとされているものを読めば学ぶことが多いでしょう。

以下に簡単に最優秀および優秀作品の講評というより感想を述べさせていただきます。

受賞者	作品名	学習センター
最優秀賞		
後藤 晃子	知識というオールを持つための学び	広島
優秀賞		
杉山 恵一	交わりは距離にあらず	北九州サテライト
本庄 久美子	学びとの出会い	東京文京
佳作		
井口 麗子	私の学びと出会い	浜松サテライト
黒澤 理絵	学ぶ生活、やっぱり楽しい	神奈川
重本 俊明	放送大学での学びと出会い	香川
鈴木 一三	学びと出会い	茨城
高橋 昌子	学びの贈り物	千葉
徳田 育子	学びは煌めく自分に会おう旅	徳島
古田 隆子	「はじまりの風」よせて	愛知

※各賞毎の氏名は50音順です。※学習センターは応募時のものです。

講評

最優秀賞「知識というオールを持つための学び」後藤晃子さん
出会いをキーワードに読んでいくと、小学生時代の差別との出会いが伏線となっている。社会的な意識を持ちながらの子育ての中で、ある社会教育ジャーナリストの著書の中の青年の体験との出会い、そこで知った放送大学との出会いがある。放送大学での朝鮮史、韓国語などの科目との出会いがお母さんの祖国への訪問となり、そこでの多くの出会いに導かれる。そして最後の卒業研究に打ち込みながら学びの意義を認める姿、これは新たな自分との出会いであることが描かれている。

優秀賞「交わりは距離にあらず」杉山恵一さん
放送大学大学院生であった前年、修士論文にとりこんでいる最中、離れて暮らすお母さんの末期ガンの知らせを受ける。仕事と遠距離にあるお母さんの看病のため、修士論文提出の延期を覚悟をする。指導教員の先生から看病に気遣いながらも、提出に向けて頑張りという便り、また全国に散らばる同じゼミの学友からの一緒に卒業しようという励まし。11月にお母さんを見送り、それでも論文を完成させ提出にこぎ着ける。距離を超えた交わりがそれを支えたことと述懐する。そこには「出会い」はあからさまには出てこないが、「学び」に対する強い気持ちが心打つ。

優秀賞「学びとの出会い」本庄久美子さん
旅行中に会った“シャリア法廷”という言葉が、作者に現代のイスラム社会にそして国際動向に目を向けさせ、その総合的な理解を目的として放送大学に入ることになる。そこで出会った学問と学習の手法が自分を見つめ直すことになり、「学び」との真の出会いがあったと作者は言う。最初のきっかけも、それなりの素地素養がなければ出会いとはならないであろうと思われる。同時に自分を高めれば新たな出会いがあることも予感させてくれる。

2010年度に第3回のエッセイコンテストが予定されています。募集が始まりましたら多くの方の応募をお待ちしております。

第2回

放送大学 学生エッセイ コンテスト

最優秀賞受賞作品

知識というオールを 持つための学び

教養学部全科履修生 後藤 晃子
広島学習センター所属



情報が氾濫する人生という大海原を航海するときに、知識というオールを手にいれると方向を見失うことなく目的地に導いてくれたり、大切な出会いを与えてくれる。私にとって学びとは、知識というオールを持つためにも必要なことである。

私は、父が日本人で母が在日韓国人であるため、二つの国の血が流れている。日本で生まれ育った母は一度も韓国の地を踏むことなく平成元年の12月、52歳の若さで心不全のため急死した。

一世の祖母は片言の日本語を話し母国語が韓国語であったため、母は韓国語を聞き取ることは出来たようだが、韓国語を会話することはなかった。今は、韓流ブームで、韓国がより身近に感じられる。とても良いことだと私は思っている。母が生きた時代は、自分が韓国人であると出自を明かすことだけで差別という苛酷な環境に置かれた。だからと言って、母が韓国へ行って生活できたかという、それも不可能に近い。やはり、母は在日韓国人なのだ。

私が小学4年生の頃だった。自分の生い立ち、育った環境には何の疑問も持っていなかった。ところが、友だちとジュースを飲もうとした時、その出来事が起きた。販促のキャンペーンか何かで、ジュース瓶の王冠の裏に国旗が印刷されていた。私が飲んだジュースの旗はたまたま「大極旗」だった。私は友だちに無邪気に言った。「この旗、母さんの国のよ」

次の日、学校に行くとクラスのガキ大将のF君が私に言い放った。

「お前、チャンポンだろうが」

私はしばらく言葉を失った。すぐに昨日の友だちとの会話が頭に浮かんだ。「それがどうしたん」と言い返すのが精一杯で、その場を逃げ出した。

その「事件」は、母には話せなかった。それからだ。私の中で、母の国籍のことを口にするのをためらう感情が芽生えたのは…。

周りの人たちが発する無言の差別感情は時に恐ろしいものがある。思い過ごし以上の「社会を支配する空気」のような威圧を感じて、私は思ったことも、感じたことも口にできず、無理やり飲み込んでしまう。そんな厳しい環境の中で、母は日本で暮らしていたのだ。

放送大学での学びのきっかけは、子育てを通して「いじめ」や「学級崩壊」を子どもと共に体験して問題を乗り越えていくうちに、今の子どもの心理や社会の現状が知りたくて、手にした本を読んだときから始まった。その本は、横川和夫氏の教育ルポ「大切な忘れもの」である。不登校経験のある青年が、さまざまな体験をした結果、勉強したいと思い18歳以上なら学歴なく入学できる放送大学を受講した。その青年は不登校ゆえに学校に管理されず、いろんな場所で沢山の人に出会い、人権や動物の権利、非暴力の問題に興味をわいてきてNGO活動にのめりこんでいく。湾岸戦争ではNGOの一員として中東に行き、勉強の必要性を感じ、放送大学で心理学、中東の歴史、英語をとって単位認定試験にも合格した。本の中でその青年が、「いまの学校のシステムはあまりにも画一的で、現実的でない。ロボット工場、養鶏場といわれていますが、その通りだと思います。英語も使いものにならないし、勉強も楽しくない。放送大学は、どんなものかと思ってやってみたんですが、おもしろいですよ」と答えているのを読んで、私も平成11年に放送大学の入学を決めた。

私は、母から韓国について何も学んでいなかった。放送大学では、朝鮮の歴史と文化、韓国語をとり単位認定試験にも合格した。そして平成12年の夏には、家族と一緒に母が一度も行けなかった韓国の慶尚北道永川市の祖先の地に墓参りに行った。祖先を敬い、自分の命があることに感謝ができ、沢山の人との出会いがあった。

現在、私は卒業研究にとりくみ、卒業を目指している。卒業研究のテーマは「自己責任が迫られるこれからの投資教育」である。急激に変化していく経済環境の中、消費者保護の観点で自分を守るために経済知識を身につけていくには何が大事で何を教育していくべきか考察している。以前、石弘光学長に「放送大学生が卒業研究を取り組むべきか」と質問する機会があった。石学長は「これから直面する様々な問題を解決する能力を養うためにも放送大学生には卒業研究を取り組んでもらいたい」と答えられた。

知識というオールを手にするために、方向を見失うことなく情報の氾濫する大海原を航海するために、沢山の人の出会いのためにこれからも私は学び続けたいと思う。

Voice of Student

Vol.1

在学生・卒業生の
声をお届け

今号の声 大学院修士課程修了生

放送大学では2001年度から大学院を設置し、現在まで修了生2,800人、現在約5,600名が修士課程で学んでいます。今号では、大学院修士課程修了生をご紹介します。社会人に広く門戸を開いた本学大学院で、仕事を持ちながら学び続け、それを職場の中で生かし、さらに一段上の目標を持ち続ける二人の思いを伺いました。

case 1

スクーリングでの先生や仲間との交流がとても刺激的でした。実習を通じて「病院臨床」という次なる目標もつかめました。



畠田 裕子さん
放送大学大学院文化科学研究科
臨床心理学プログラム修了生
NPO法人ブラッ 共同作業所「ヒュッテ」勤務

福祉施設の職場で、統合失調症や躁鬱病の患者さんたちと、グループワークなどを通じて、心理と福祉の両面から関わらせていただいています。臨床心理士を目指していた京都文教大学在学時から、今の職場でお手伝いしてきたこともあり、働きながら学べる道を選びました。大学院でのスクーリングが印象に残っています。職業や年齢の違う方々と、直接対話しながら学べるのがとても刺激的でした。一番年下だったこともあり、同期生の皆さんからいろいろ教えていただきましたね。私の目指している臨床心理士として活躍されている方もいて、実際の現場での貴重な体験談も聞かせていただくことができました。修士論文の指導では、藤原先生から直接

アドバイスを受けられ、「臨床心理士とは何か」というアイデンティティに関するお話をいただくなど、月に1回、先生にお会いできることがとても楽しみになるぐらいでした。先生方や同期生の方々との交流を形に残しておきたくて、オリジナルの「卒業アルバム」も作っちゃいました（笑）。皆さんにもお渡しして大好評でした！



また、病院実習として、大阪医療センターでHIV/AIDSの病院臨床を体験できたことはかけがいのないものとなりました。心理カンファレンスや心理検査、インタビュー形式の患者さんたちとの面接など、約半年間で11名の患者さんたちとの出会いがあり、ご本人の人生に関わるような臨床ケースを通じ、この仕事の奥深さを実感しました。今まで福祉施設で「地域支援」を軸にやってきた私にとって、「病院臨床」というもう1つの柱が見つかった気がします。

将来的には、臨床心理士の資格を活かした仕事に就くことはもちろん、専門的な知識や技術を活かして、「心理臨床家」という立場で人に関わっていけ

たらと考えています。これからも、様々な人との出会いや学習機会を活用し、チャレンジ精神をもって、さらに自分を磨いていきたいと思っています。

case 2

自分の問題意識に対して 正直に学び続けてきたことで、 自ら企画提案した事業に 携わることができたと思います。



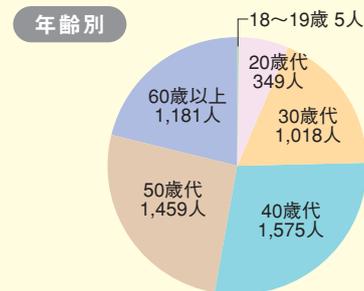
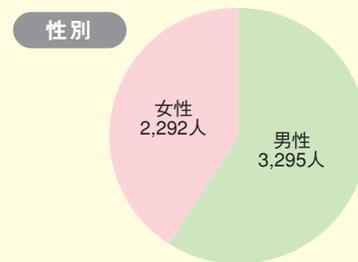
野村 政子さん
放送大学大学院文化科学研究科
政策経営プログラム修了生
埼玉県行田市役所福祉課勤務

保健師として働く中で、より学問的に、専門的な言葉で語れる力や、専門職として事業を推進していく力を身につけたいという想いが強まりました。大学院に入学する以前から、放送大学の教養学部の発達と教育専攻で心理学を中心に学び、認定心理士の資格も取得できました。学部卒業後は修士科目生として学習を続け、そうした学習プロセスの中で、ライフワークとなっていく「虐待防止と権利擁護」というテーマにたどりついたのです。大学院では、自治体の専門職として働く立場を活かし、より複合的な視点、学際的なアプローチを行政に活かしていくことを考えるようになりました。平成17年に、高齢者、障害者、児童の3つの虐待を防止する条例を行田市が施行し、自分の問題意識と社会の流れが重なってきたのです。そして、もう1つのテーマとして問題意識を持っていた「役所の縦割りの弊害」に対して、行動を起こしました。職員提案という形で、「トータルサポート推進事業」を企画立案し、具体的な施策に自ら取り組むことが実現できました。「ふくし総合窓口」を設け、市民と役所と関係機関が連携して、安心できる街づくりを推進していく事業です。まさに「仕事と学問」を融合し、実践的に深めることができたのです。研究者としても著名な先生方の知識やアドバイスは、他の同期生の違うテーマへの

助言ですら、とても勉強になりました。他分野の技術が、自分のフィールドに活かせることを放送大学での学習で身につけることができたのです。これからの社会の中で、看護や保健に関わる仕事をしていくには、「人をケアするためには、援助する側こそ幅広い視点で考えられなくてはいけない」と感じています。だからこそ、問題意識を持って学び続けることがとても大切であると実感していますし、私自身の学びもまだまだ続けていきます。高い目標ですが、「博士課程」まで到達できるよう、夢を描いています。

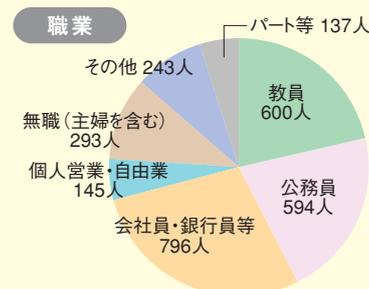
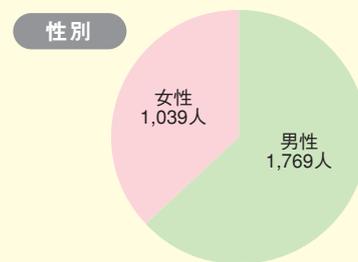
大学院修士課程在学学生5,587人のデータ

(平成22年度第1学期現在)



大学院修士課程修了生2,808人のデータ

(平成22年3月末現在)



就任のごあいさつ

就任あいさつ

自然と環境 教授 米谷 民明
自然環境科学プログラム



4月より着任した米谷民明です。専門は、理論物理学で、前職の東京大学では、30年間にわたって物理学の様々な講義を、学部新入生から大学院までのレベルで担当しつつ、素粒子の統一理論を目指す研究を進めてきました。素粒子論は、抽象的で、なじみにくいものと思われるかも知れませんが、しかし、自然法則の最も基礎的な側面を追求するため、法則の意味を常に顧みなければならず、先入観にとらわれず、物理学の基礎に立ち返って物事を問い直す作業が求められます。一見抽象的に見えても、考えの起源は私たちの日常経験から育ってきたものなので、身近な経験や初等な物理学とも接する部分が意外と多いのです。これまで、物理学の考え方を、できるだけわかりやすく伝えるような努力を、機会あることにしてきました。放送大学では、物理学の面白さをわかっていただけのように色々工夫するとともに、みなさんとともに私も学びながら、自然の基礎法則や応用の追求を通じ、人間と科学の関わり合いについて、一緒に考えてゆけることを楽しみにしています。

就任あいさつ

社会と産業 教授 森岡 清志
社会経営科学プログラム



4月から放送大学に着任いたしました森岡清志です。「社会と産業コース」「社会経営科学プログラム」に所属しています。こちらに着任する前は、首都大学東京(前の東京都立大学)人文科学研究科につとめていましたが、東京都立大学時代と合わせると、28年間在職していたことになります。最初に大学の教員として勤務したのは北海道大学です。北大、都立大および首都大、そして放送大学と、これまでに勤務先を3つ異動してきたわけですが。専門は社会学です。社会学の中でも都市社会学や地域社会学に関わる領域を中心に研究しています。たとえば都市生活や都市社会の人間関係にみられる特質を明らかにする研究として、都市的生活様式論、都市的生活構造論、パーソナル・ネットワーク論などをテーマに実証的な研究を実施しています。また地域社会の現状分析をすすめるために、社会地区分析や地域集団の構造分析なども手がけています。1990年以降、この20年間に日本の都市はさまざまな側面において大きく変容してきました。この変容の意味を明らかにし、変容に伴って発生する問題の拡がりや興行きを捉え、それを内面的に理解することが私の研究の大きなねらいです。

現代社会に関する鋭い問題意識を秘めながら、皆さんと一緒に学び研究していきたいと思っております。どうかよろしくお願い申し上げます。

学習センター所長

北海道学習センター 筑和 正格

(元北海道大学大学院国際広報メディア研究科長)



4月の「入学者の集い」では、200名を超える幅広い年齢層の学生の熱気に打たれました。それに答えるべく、熱意をもって任務に取り組み所存です。専門は「独文学」と「都市文化論」です。「ベルリン都市文学」から「都市と文学」、そして「都市文化論」と研究領域を展開させてきました。研究上の経験が、学習センターの「学び甲斐」を高めることに役立てばと願っております。よろしくお願いいたします。

福井学習センター 鈴木 敏男

(前福井大学大学院工学研究科長)



72年に大学院を卒業し、昨年度福井大学を定年退職するまで、国内外8か所の大学関係の職場、5つの機関の長期滞在を経験しましたが、これまで与えられたことのないミッションをもつ放送大学で、今、新鮮な気分になっています。グローバル化した現代社会において、常に自分の教養を高め、或いは、そのことによって自分の専門性を深めることは、地球市民の責務と思っています。学生の皆さんの支援に全力を尽くすつもりですので、宜しくお願い申し上げます。

岐阜学習センター 古田 善伯

(前岐阜大学理事・副学長)



10年ほど前に行った面接授業の記憶が今でも鮮明に残っています。受講された50名以上の方々が真剣に話を聞いている姿勢を目の当たりにし、その熱意に感心しながら講義を行ったことを今でも忘れることができません。今年の4月から岐阜学習センターの所長として勤めることになりましたが、放送大学の学生の皆さんの学習意欲と熱意に応えられるセンターを目指して、精一杯支援ができるよう努力していきますのでよろしくお願いいたします。

愛知学習センター 若尾 祐司

(前名古屋大学理事・副総長)



この4月、愛知学習センター所長に就任しました若尾祐司です。専門は歴史学(西洋史)で、昨年、面接授業「ヨーロッパ社会と近代化」を担当しました。所長の仕事に就いてまだ日は浅いですが、なによりも、様々な困難を乗り越えて履修されている学生の皆さんの、強い意思を教えられています。その思いが報われるよう、客員教員および事務員の方々と力を合わせ、学びの支えとなるセンター作りを進めたいと願っています。

奈良学習センター 池原 健二

(元奈良女子大学理学部長)



奈良学習センター所長を拝命しました池原健二です。専門は生命科学で、奈良女子大学在職中は主に遺伝子や遺伝暗号、タンパク質、そして生命の起源に関する研究に従事していました。学ぶことは自然や社会、人の心の中などに潜む仕組みを理解することだと言えるでしょう。そのような場を広く提供している放送大学の役割は極めて大きく、私はその拠点となっているセンターを通じて少しでも学びやすい環境を作るために努力するつもりです。よろしくお願いいたします。

和歌山学習センター 八丁 直行

(和歌山大学名誉教授)



2年前に和歌山大学経済学部を定年退職し、時間に縛られない日々を味わっていました。定年の数年前から、「関西経済圏と中国の相互経済関係の深化と地域経済」を主題とするプロジェクトに情報システム・ネットワークの面からかかわって、中国進出の日本企業や日本進出の中国企業を現地調査する過程で、グローバルに活躍できる人材の育成の必要性を痛感しました。図らずも生涯学習の役割を担う放送大学学習センター所長に就任し、非力ですが、そのことで少しでも貢献できればと願っています。

就任のごあいさつ

福岡学習センター 小寺山 亘

(前九州大学理事・副学長)

九州大学で38年間教員、研究所所長、理事・副学長として勤務しました。専門は海洋工学です。九州大学の最後の6年間は研究所や産学連携組織のマネジメントをしてきました。学習センター所長は教育組織のマネジメントが仕事ですので、初心に帰って勉強中です。福岡は活気にあふれた地域です。この恵まれた環境とこれまで培ってきたネットワークを生かして放送大学の発展に貢献したいと思っています。よろしくお願いいたします。



熊本学習センター 崎元 達郎

(前熊本大学長)

初仕事の「入学者の集い」において、「主婦として言葉に尽くせぬ苦労を重ねたが、ようやく子供を大学に入れたので、自分も大学に入って学習ができる」と喜びを語られた学生代表の挨拶に胸を熱くし、全力で皆様をお支えせねばとの決意を新たにしました。通常の大学との違いのうちで、プラス面を最大限に活用し、マイナス面を克服していただけるよう支援の充実に努めると同時に、できるだけ多くの皆様に、放送大学の生涯学習プログラムを享受していただきたいと考えています。



大分学習センター 五十嵐 副夫

(前大分大学副学長)

4月から神戸前所長の後任として赴任しました。40年にわたり大分大学経済学部で経済原論を中心に教えてまいりました。景気循環や産業構造の変化、大分県経済の変遷等について研究を行ってきました。大分県は地域的に分散しており、学習センターに集まりにくいのですが、メディア等を活用して幅広い学生の多様な要望に沿った、より学習効果のあがるような環境を備えたセンターにしていきたいと思っています。



沖縄学習センター 宜保 清一

(前琉球大学副学長)

沖縄は東京から遠く離れているだけでなく、島しょ県である故に、高等教育にかなりの経済的負担が強いられています。放送大学のすばらしさの周知に努め、一人でも多く入学していただけるよう、関係各位のご協力を得ながら、条件不利地を少しでも返上したい。在学生や卒業生から放送大学を活用してよかった！友達へ入学を勧めたい！などの声が多いただけるよう、所員一丸となって取り組んでいきます。



退任のごあいさつ

楽しさをありがとう

放送大学の8年間に大学初という事業3つにかかわりました。寄付科目を導入し制作したこと、学長特別補佐という役目を与えられたこと、Political Economy of Japan を放送教材・印刷教材・試験問題とすべて英語で制作したこと、の3つです。放送科目の制作は本当に楽しいものでした。気がつけば主任講師として8科目、分担協力講師分も含めると、全部で10科目の制作にかかわりました。全国から様々なテーマを抱えて集まってくる熱心な大学院生の指導も楽しいものでした。私はただ研究を見せられるのが面白く、論文制作を指導するというよりは、論文の熱心な読者であったというのが実情です。放送大学にはまた、一流の先生方が集まっておられます。悔やまれるのは、そういう先生方ともしっかり議論して学びたかったということです。遅ればせながら、これから印刷教材を通して勉強させていただこうと思っています。

社会と産業 教授 林 敏彦
社会経営科学プログラム



新しい学びの形の創出を目指して

放送大学には1年間、その前身のメディア教育開発センター時代を含めても3年間と短い在籍期間でしたが、大変お世話になりました。放送大学はメディアを用いた高等教育機関として日本では稀有の存在であり、そのような組織に短期間とはいえ所属できたのは幸運だったと思います。放送大学が提供するような場所・時間を問わない教育環境は、今の時代のニーズにマッチした教育サービスの基盤となる大きな可能性を秘めていると思います。一方で、教育プログラムや運営・組織の在り方などを、変化の速い時代の流れに適合させていくことは一筋縄ではいかないと思います。しかし、この時代、変化に適合できない組織は生き残れないというも真実だと思いますので、今後ますますそのような努力が必要になるのではないかと思います。具体的にはICTの活用やeラーニングなどに対する本格的な取り組みがより一層求められると思います。その際、忘れてならないのは、ICTやeラーニングは単なる従来の手段の置き換えではない、ということです。これは、過去10年にインターネットが引き起こしてきたことを振り返れば明白です。自宅にいて、何百・何千という店舗の情報から自分の好みにあった商品を選択し、それを決められた時間に自宅に届けさせるといったサービス、あるいは、同じ動画を見ている世界中の見知らぬ人と瞬時に意見交換ができるといった環境は、インターネットなしには実現できないとともに、従来では想像できなかった全く新しい消費やコミュニケーションの形態であることに注目すべきです。教育の分野でも、従来の教育モデルにICTを当てはめるのではなく、ICTが産み出す新しい学びの価値や可能性を追求する努力が求められると思います。私自身は他大学に移りますが、継続してeラーニング分野での研究・実践を継続し、新しい学びの形の創出に携わっていきたくと考えています。再び皆様とご一緒できる機会もあるかと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ICT活用・遠隔教育センター
ICT活用・遠隔教育推進部門 仲林 清



和歌山学習センター 橋本 卓爾

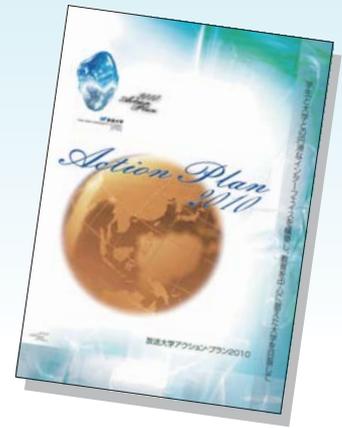
学習センター所長

和歌山学習センターの所長として就任した平成21年4月、センターに所属されている900名近い学生の皆さんの学習内容や環境を少しでも良くしたい、放送大学の知名度を高めたい、学生を一人でも増やしたいという思いを抱いて所長室に入りました。しかし、この思いをほとんど実現させることなく、僅か1年で退職し、本当に申し訳ありません。学生の皆さんをはじめ関係者の方々に深くお詫び申し上げます。今は、ただ放送大学のますますの発展を祈るのみです。



Action Plan 2010

学生と大学との円滑なインターフェイスを構築し、
教育を中心に据えた大学を目指して策定された「アクションプラン2010」。
放送大学の継続しつつある新たな試みに思いを馳せてください。



「アクションプランは、二度提案される」

アクションプラン2010は、二つのゴールを目指しています。「学生との密接な意思疎通を図ること」と「国際的な視野を広げること」です。今回、この二つの課題が、まず石学長から示され、若手7名の先生方による幅広いヒアリングと真摯な討論を経て、さらにもう一度学長の手が加えられています。第1回目の「プラン2008」の基本路線がかなり引き継がれていますが、人生も二度繰り返したいと思うころに、ようやく楽しみがわかるように、放送大学のアクションプランも二度噛むころに、ようやく味が出て浸透するといえます。

放送大学の学生の方々と接していつも思うのは、多様だなということです。教養を深める人もいるし、資格を狙う人もいるし、さらに専門を究めたいという人もいます。放送大学がどのような教育・研究を行っていくのかという基本的な問いは、いつでも学生の間で、先生方の中で、さらに職員の方の間で問い直されてきていますが、このような多様な問いかけに対して、それをいかに旗印にまで集約し表現していくのか、というのが、アクションプランの使命です。二つの課題から始まって、「学習センター機能の明確化と強化」「学びのコミュニティの創造」「情報コース・プログラムの新設」「情報リテラシー教育の実施」「国際社会における連携推進」などの10の具体的なプランに結晶化しています。

ヒアリングの中から、今回のプランの中心となってきた言葉があります。「サポート（支援）」です。放送大学は遠隔教育を主眼としているために、つねに、双方向的な仕組みで補完する必要があります。面接授業の充実やIT技術による補助を図り、学生からの反応に答えることが絶えず必要です。けれども、今回はこのような補完的な支援機能ばかりでなく、

それ以上に地域に密着したり大学院指導をサポートしたりする多彩で積極的な支援体制を提案しています。

すでに日本語にも入ってきている言葉なので改めて確かめるまでもないかもしれませんが、サポートというのは、13世紀ごろから使われ始めた言葉で、ポートつまり運ぶという意味と、それを補佐（サブ）することという意味があります。このことは教育・研究にとってはたいへん示唆的です。誰が主体となって「運ぶ」のかが問われます。何を運び、どのように運ぶのかを決定するのは、サポートされる学生なのであって、サポートする大学はあくまで一生懸命にそれを補佐することに徹しているのです。主客が逆転することのないように気を配りながら、しかもきめ細かいサポート体制を図っています。学部でのサポーター、大学院でのアシスタント、さらにコールセンターや、本学内部でのICT活用・遠隔教育センターとの連携などの支援機能の充実を計画しています。これらの試みは、次第に放送大学の中核となっていくことでしょう。

また、放送大学に対しては、国際的に展開する交流役割への期待が日に日に高まってきています。昨年日本で開催されました世界公開大学学長シンポジウムや、NYでの学生モニターなどに結実されてきています。

アクションプラン2010は、各学習センターで配布されております。またインターネットからも得ることができますので、ぜひ一度詳しい内容を読んで、放送大学の継続しつつある新たな試みに思いを馳せていただきたいと思います。そして、意見をお寄せくだされば、アクションプランはきっと三度目を目指して、進化しつづけることでしょう。

(Action Plan 2010検討グループ)

BSデジタル放送の開始及びCSデジタル放送終了のお知らせ

企画管理課

放送大学学園では、平成23年10月よりBSデジタル放送を開始する予定です。これに伴い現在行っているCSデジタル放送(スカパー!SD)は平成24年3月末をもって終了することとしております。

BSデジタル放送は、CSデジタル放送より高画質でより安定的に受信できるとともに、データ放送による学習センター情報等の提供が可能となるなど、学習環境の一層の向上が見

込まれます。

現在、CSデジタル放送で授業番組を視聴されている方は、「学生生活の栞(学部27P、大学院26P)」を参考にしてBSデジタル放送の受信機器等への切り替えをお願いします。

なお、チャンネル番号等詳細については現在未定ですが、決まり次第お知らせいたします。

Web学習システム・通信指導を開設しました

学生課・情報推進課

今年度から、従来の郵送による方法だけでなく、新たに、一部の科目を対象に、『Web学習システム・通信指導』(略称:『Web通信指導』)を開設しました。これによって、インターネットに接続されたパソコンがあれば、自宅からでも通信指導問題の提出が可能になりますし、解答提出後には、すぐに解説を見ることができます。また、何度も解き直すことができますので、単位認定試験に向けた学習にも、有効に活用していただけます。

平成22年度1学期現在、対象となる科目は、まだ、大学院科目27科目、学部科目2科目と、一部ではありますが、今後、科目数を増やしていきます。受講科目が対象科目でない場合でも、お試し科目を用意しておりますので、ぜひ一度アクセスしてみてください。



URL <https://tsushin.ouj.ac.jp/>

情報リテラシー教育を開始します

情報推進課

「初歩からのパソコン(基礎科目)」の面接授業を、平成2010年度の2学期から平成2011年度の1学期にかけて、全国の学習センターで開始します。放送大学では、社会の情報化と学生の要望に応じて、インターネットで放送授業の映像や音声を視聴したり、科目登録申請や単位認定試験の成績チェックをでき

るように、IT化を進めています。その一環として、より多くの学生に、パソコンの操作やインターネットを使いこなすために必要な初歩的な技能を身につけてもらうために、共通テキストによる演習形式の面接授業として実施します。

大学の窓からのご案内

The Open University of Japan

「大学の窓」は、学生の皆さんの学びに役立つさまざまな情報をお伝えする15分番組です!

放送大学からのお知らせだけでなく、全国各地の学生の皆さんの学ぶ姿や活動を紹介しています。4月から新しいアナウンサーを迎えて、より一層充実した内容をお伝えしていきます。ぜひ、ご覧ください。

放送時間 (テレビ・ラジオ)	12:45~13:00
	19:45~20:00

*毎週木曜日から新しい内容で放送します。

●番組へのご意見・ご感想は…

〒261-8586 千葉市美浜区若葉2-11
FAX 043-297-2781
メール mado@ouj.ac.jp 「大学の窓」係まで



アナウンサー紹介



宮田 英里(みやた えり)アナウンサー
5年目になりました。学ぶ皆さんの姿を見て、私も毎学期学生として学んでいます! 全国に取材に伺いますのでぜひ気軽に声をかけてください。よろしくお願いします。



鷹觜 亜希子(たかの はし あきこ)アナウンサー
お会いする皆さんからいつもパワーをもらっています。今年度も学ぶ皆さんの姿を取材させていただきます。お会いした際にはよろしくお願いします!



佐治 真規子(さじ まきこ)アナウンサー
いつでも、どこでも、誰でも学べる放送大学の良さを、私自身も体感しながらお届けしたいと思っています。時には学習の息ぬぎに、また時にはヤル気をアップして貰えるような楽しい番組作りを目指します。放送大学についての疑問や学習を皆さんからのお便りもお待ちしております!

国立劇場における学生割引料金適用について

学習センター支援室

この度、2010年度より全科履修生及び修士全科生の方に対して、国立劇場の入場チケット購入について、学生割引料金が適用されることとなりました。

学生割引料金は電話予約・窓口販売での利用が可能です。インターネット予約では学生割引料金が適用されませんので、ご注意ください。また、チケット受け取りはチケット売り場のみとなります。宅配便・コンビニでの受領はできません。

電話予約の際は学生割引対象者であることを伝え、チケット受領の際には学生証を必ずお持ちください。

●電話でのご予約は

0570-07-9900

または

03-3230-3000

教養学部学生及び大学院修士選科生・修士科目生 募集

広報課・学生課

平成22年度第2学期の学生募集を以下のとおり行います。

出願期間	平成22年6月1日(火)～平成22年8月31日(火)
可否通知等	平成22年6月下旬～平成22年9月中旬
学費の納入	平成22年6月中旬～平成22年9月末
入学許可通知	平成22年7月上旬～平成22年9月末
印刷教材等の配送	平成22年7月下旬～平成22年9月末
授業開始	平成22年10月1日(金)

・放送大学に関心があるご友人、ご親戚他お知り合いの方にも、この機会にぜひ本学についてご紹介くださり、入学をお薦めいただくようお願い申し上げます。

また、平成22年9月末をもって学籍が切れる学生の方で、平成22年度第2学期以降も引き続き学習を希望される場合は、改めて入学手続きが必要となりますが、入学科が割引になります。

・出願締切日は平成22年8月31日(火) <必着>です。

大学院修士全科生 募集

教務課

放送大学大学院では、平成23年度修士全科生の学生募集を以下のとおり行います。

出願期間	平成22年8月20日(金)～平成22年9月10日(金) 18:00(必着)
第一次選考(書類審査)可否通知	平成22年10月8日(金) 発送
第二次選考(筆記試験)	平成22年10月24日(日)
第二次選考(面接試問)	平成22年11月13日(土)～平成22年11月14日(日)
可否通知等	平成22年12月17日(金) 発送
学費の納入	平成23年3月上旬～平成23年3月中旬
入学許可書・印刷教材等の配送	平成23年3月中旬～平成23年3月下旬
平成22年度授業開始	平成23年4月1日(金)

・修士全科生は、修士課程を修了して、学位「修士(学術)」の取得を目指す学生です。

・大学卒業(卒業見込みを含む)の方またはこれと同等以上の学力があると認められた方※が出願できます。

・募集人員は500名で、入学者選考に合格した方が、入学できます。

・修士選科生・修士科目生として修得した単位は、その後本学大学院に修士全科生として入学した場合、原則として大学院の修了要件として認められます。

※本学が行う出願資格事前審査で認められることが必要です。申請期間は、平成22年7月23日(金)～8月3日(火)です。詳細は募集要項をご覧ください。

編集後記

本号の対談で岩槻先生が「生物多様性を守るとか、利用するとかではなく、自分自身がその中で自分の生きざまを持続していくという考え方が大事です」といられています。

生命(いのち)のつながりの一環としての一人一人が少しの間も立ち止まることなく新たな自分を作り続けることは、生涯学習とも共通しています。3月27日のNHKホールに溢れていた厳粛で暖かな感動は、険しい道程を乗り越えた卒業生の自信とそれを支えてくれた家族や友人への感謝から沸き起こったものだったのでしょうか。

私自身も、フレッシュな頭・心・身体への挑戦を続けたいと強く思うこの頃です。(松村祥子)

放送大学通信 オン・エア 編集委員(平成22年度)

委員長 教授 松村 祥子
委員 教授 高崎 絹子

准教授 岡崎 友典

准教授 原田 順子

教授 青山 昌文

教授 杉森 哲也

教授 生井澤 寛

准教授 大西 仁

千葉学習センター所長 教授 宮崎 清

東京文京学習センター所長 教授 桂井 誠

編集事務担当 総務部広報課



 **放送大学**

http://www.ouj.ac.jp/ ISSN 1343-3369

ご意見やご感想をお聞かせください。メールアドレス editor@ouj.ac.jp